

「すべての子どもにひとしく 教育を保障する学校づくり」

NPO発達保障研究センター理事長 品川文雄

青木嗣夫さんと出会ったのは、京都府立与謝の海養護学校に押しかけ実習した1971年。卒論執筆に悩む私は先輩に『未来を切り開く障害児教育』（鳩の森書房1970年）をすすめられ、青木さんの「与謝の海養護学校設立運動の歩み」を読み感動した。

紹介状も推薦者もなく電話で「実習させてほしい」とお願いしたところ、学年末の忙しい時にもかかわらず二つ返事でOK。寄宿舎にも泊まり24時間障害のある子どもたちと過ごすなかで、この学校の教育と障害児教育そして青木さんに魅了された。その後、卒論の資料収集に出向いた私を宿泊させ、惜しげもなく原資料を提供してくれた。

青木さんは、「学校づくりは箱づくりではない、民主的な地域づくりである」とした与謝の海養護学校設立運動を牽引し、開校後は養護学校義務制以前の時代にさまざまな困難と闘いながら「すべての子どもにひとしく教育を保障する学校づくり」をすすめた。

その後、与謝・丹後地方の小学校、中学校の校長を歴任し、「学校に子どもを合わせるのではなく、子どもに合った学校をつくらう」という障害児教育で明らかにされた教育

実践の原則を創造的に発展させる学校づくりをおこなった。与謝の海養護学校在職中、1972年に日本教育学会・分科会で「与謝地方の教育運動」を提案し、京都府が設置した障害児教育推進協議会では副会長として1978年報告書「京都府における障害児教育の推進について」をまとめるなど、養護学校義務制を巡る議論で先駆的な役割を果たした。

*

青木さんは「神風が吹いて日本が戦争に勝つこと」を信じ込ませ、自分を騙し欺いた絶対主義的天皇制に基づくファシズム教育に悔しさとたぎる怒りがある。背景に学徒動員先で空襲により同郷の親友を失い遺体を茶毘にふし遺骨を遺族の元に届けた経験がある。これが戦後を生きる教師青木さんの土台と骨格だった。

さらに教師を分断し、教育の国家統制をもくろむ勤務評定や能力主義教育を強化する学力テストに反対する闘いのなかで、教育への権利意識に目覚め、「子どもの権利を守る教育の確立のために、もっとも阻害された条件にある知えおくれの子、病弱な子、貧困な家庭の子達の教育」の確立を誓う。その後の与謝の海養護学校設立運動では教育権、発達権



(文理閣)

青木嗣夫さん

あおき つくお / 1928年～1995年。

1948年京都師範学校本科卒業。通常学校を担任後、1951年桑飼小学校障害児学級の担任となる。与謝の海養護学校設立運動を牽引し、開校した与謝の海養護学校では、教育実践・学校づくり・地域づくりの中心的役割を果たした。1989年の定年退職後、子どもの森保育園理事長・全障研京都支部支部長を歴任。著書に「未来をひらく教育と福祉—地域に発達保障のネットワークを築く」(文理閣)など多数。

の考えを深化させた。

これは養護学校義務制実現の運動を推進した全国各地の教職員の思いや歩みとも重なる。

青木さんが亡くなって23年。第28回全障研全国大会(京都)の副委員長として、よろずなんでも相談をおこない、車やバスを誘導する姿を鮮明に思い出す。人間的なやさしさと強さをあわせもち、新しい未来社会を創るため全力を挙げて闘い抜いた青木さんの生き方に共感する。

(しながわ ふみお)